

修辞表現理解過程における“逸脱”の検出¹

—会話の原則に照らした新しい修辞分類の試み—

北海道大学 金子康朗・佐山公一・阿部純一

いわゆる修辞表現 (figurative speech, figurative utterances)²なるものは、日常の言語使用の中に広く見られ、それらに対して伝統的に数多くのレッテルが張られており、そのレッテルは日常的な語彙の一部にさえなっている。例えば、“比喩 (simile, metaphor, metonymy, synecdoche)”, “反語 (irony)”, “皮肉 (irony)”, “誇張 (hyperbole)”, “逆説 (paradox)” などである。しかしながら、修辞表現の産出や理解の過程の性質についてももちろんのこと、修辞表現の“質ないしは技巧”や産み出される心理的“効果”に関しての類似性と相違点でさえ、これらの伝統的な分類概念では明確にはとらえられていない。このことは、例えば、“効果”に関する用語である“皮肉”や“誇張”と“質あるいは技巧”に関する用語である“比喩”や“逆説”とが、一般に修辞範疇として同列に並べられていること (例えば、佐藤, 1978, 1981 など) からも見取れる。

本研究では、修辞理解は全て、与えられた言語表現がなんらかの点で“通常の”表現とは異なっていると (意識的か無意識的かを問わず) 感知されるところから始まるものであり、しかもその“逸脱”はコミュニケーション上の諸規則 (性) に照らして感知 (検出) されるという想定の下に、新しい修辞分類体系の構築を試みる。すなわち、各種の修辞表現を、それぞれの検出される“逸脱”の質・種類によって分類してみようとするものである。このような、いわゆる当該現象の自然類 (natural classes) を正しく把握した上で修辞理解の過程を心理学的に説明しようとするアプローチは、Sperber & Wilson (1981a, 1981b) によっても採用されてい

¹ Detection of “anomalies” in the understanding of figurative utterances: A new rhetoric classification against the conversational maxims.

by Yasuo Kaneko, Koichi Sayama, and Jun-ichi Abe

(Department of Behavioral Science, Hokkaido University)

本研究は文部省科学研究費 (一般研究C, 課題番号60510038, 研究代表者阿部純一) および同費 (特定研究2, 課題番号61220001, 研究代表者阿部純一) の補助を受けた。

² 厳密に言えば、修辞表現とは、聞き手 (あるいは読み手) によって“修辞”として理解された言語表現を称するものであり、外的刺激自体として存在するものではない。

る³。しかし、以下で述べるように本研究はこれを逸脱の種類と関係づけようとしており、この点で Sperber & Wilson (1981a, 1981b) とは異なる。

修辞に関する我々の関心は、究極的には、一定の表現形式が、文字通りの意味 (literal meaning) を伝達すること以上もしくは以外のプラス・アルファの心理的な効果を産み出すところの心理学的なメカニズム、すなわちそのような効果を産み出す言語表現の発話や理解の心理過程の解明にある。しかし、本研究ではまず、その逸脱の検出が修辞理解過程の第一段階に相当すること、および、検出される逸脱の種類が修辞表現の質やプラス・アルファの心理的な効果に関しての修辞表現間の類似性と相違点を捉え得る枠組みともなっていること、の二点を検証するための仮説的枠組みを設定することを目標にしている。

逸脱の有無を判定する規準として従来から採られて来ているコミュニケーション上の規則 (性) は、生成文法で言うところの“選択制限・共起制限 (selectional restrictions, restrictions of cooccurrence)”や Grice (1975) の“会話の原則 (conversational maxims)”などである。選択制限による逸脱の判定とは、例えば、次のようなものを言う。

(1) いいコートはつぶやく。[IS]

この文例では“つぶやく”の素性 [+human] と“コート”の素性 [-human] とが一致していない。このような素性間の不一致の有無の判定が選択制限による逸脱の判定である (Chomsky, 1965)。また、会話の原則による逸脱の判定とは次のようなものを言う。

(2) 女は女だ。

この文例には、文字通りの意味では新しい情報がまったく含まれていない (トートロジーである)。その意味で、この文は情報量の過不足なく話せという量の原則に違反していると言える。このような、文字通りの意味で読んだ場合の、会話の原則に対する違反の有無の判定が、会話の原則による逸脱の判定である。ちなみに、例文(1)は、会話の原則に照らしてみた場合には、嘘を言うなという質の原則に違反しているとみなすこともできる。

しかしながら、従来の修辞研究 (例えば、Grice, 1975; Wilson & Sperber, 1981, など) においては、より包括的な規則 (性) である会話の原則が問題にされている時でさえ、その原則の全ての項目が考察の対象となっていたわけではない。それは、従来の研究では主として、隠喩や反語などのごく少数のタイプの修辞にその興味が限られていたこと、さらには、言外の意味まで含めた場合には結局は会話の原則が守られているのではないかとみなされるため逸脱の有無を判定する規準としては徹底的には用いられてこなかったこと、などによるものと思われる。そこで本研究では、逸脱の有無を判定する規準として現時点で最も包括的であると考えられる会話の原則を採用した上で、できるだけ多種多様の修辞表現を対象とすること、および、

³ ただし、Sperber & Wilson (1986) ではアイロニーは自然種 (natural kind) ではないとされている (p. 240)。

それらを会話の原則の全ての項目に当てはめてみることにし、さらには、必要ならば他のコミュニケーション上の規則（性）をも参照すること、を目指すことにした。

さて、会話の原則（Grice, 1975）とは、コミュニケーションにおいて話し手は聞き手に対して協力的であるはずだという暗黙的前提を明示的に体系化したものであり、その内容は、以下のように、量、質、関連性、様式の4つのカテゴリーに分けられている。

量：

1. “あなたの寄与を、（やり取りのその時点での諸目的のために）必要とされているだけの情報量があるようにせよ。”
2. “あなたの寄与を、必要とされている以上に情報量のあるものにしてはいけない。”

質：“あなたの寄与を真実であるところのものにしようとしてせよ。”

1. “あなたが虚偽であると信じていることを言うてはいけない。”
2. “あなたが適切な証拠を持っていないことを言うてはいけない。”

関連性：“関連性があるようにせよ。”

様式：“はっきりと表現せよ。”

1. “表現の不明瞭さを避けよ”
2. “多義性を避けよ”
3. “簡潔であれ（不必要な冗漫さを避けよ）。”
4. “順序正しくせよ”

そこで我々の実際の課題は、修辞表現であると判断される言語表現の文字通りの意味がこれらの項目に照らして逸脱があると判定される場合には、その場所へ割り当てること、さらには、必要な箇所では下位の項目を立てること、とした。また同時に、会話の原則と無関係であると判断される修辞表現にも対処するために、会話の原則自体を下位項目として含むようなより包括的な枠組みを作ることも行なった。以下にその現段階での結果を示す。

修辞表現の新しい分類

文字通りの意味を伝達すること以上もしくは以外のプラス・アルファの心理的効果を産み出す言語表現（修辞表現）を、上述の手順で逸脱の種類に基づいて、分類した。

分類の対象となる言語表現例は、佐藤（1978, 1981）に載せられている修辞表現例（伝統的
分類体系の下に整理されている）からの139例をはじめとして、広告コピー文集、その他から総
数約2600例を集めた。

既に述べたように、分類の出発点として“文字通りの意味において‘会話の原則’からの逸
脱が感じられるもの”を採用し、その内部の項目に従って表現を分類した。しかし、そこに収
まらないと考えられる表現もかなり見い出されたため、会話の原則からの逸脱以外の項目も設

定した。その結果、分類の枠組みは以下ようになった (Table 1 参照)。まず、一番上位の分類概念として、

- (A) コミュニケーション上の規則 (性) に関して逸脱が感じられるもの。
- (B) 文脈内での表現の出現位置と頻度とに関して統計上の標準値からの逸脱が感じられるもの。

の二つの項目が設定された。そして、前者(A)に属する項目として、

- (A-1) 文字通りの意味において会話の原則からの逸脱が感じられるもの。
- (A-2) 正書法からの逸脱が感じられるもの。
- (A-3) 文体に関する規則からの逸脱が感じられるもの。

の三つの項目が設定された。

本研究は(A-1)に基づく分類が出発点となっており、また実際にこの項目に含まれる修辞表現例はその数が多かったため、この項目の下位項目は、会話の原則に照らした分類として、別の Table 2 に詳しく挙げることにした。

- (A-2)の下位項目として、
 - (A-2-1) 表記体系の使い方に関して逸脱の感じられるもの。
 - (A-2-2) 引用の仕方に関して逸脱の感じられるもの。

の二つ、(A-3)の下位項目としては、

- (A-3-1) 伝達媒体に照らした使用法に関して逸脱の感じられるもの。
- (A-3-2) 受け手および発話状況に照らした使用法に関して逸脱の感じられるもの。

の二つが設定された。

- また、後者(B)に属する項目として、
 - (B-1) 反復性、繰り返し性に関して逸脱の感じられるもの。
 - (B-2) 前後対称性に関して逸脱の感じられるもの。
 - (B-3) 順序性に関して逸脱の感じられるもの。

の三つの下位項目が設定され、(B-1)についてはさらなる下位項目として、

- (B-1-1) 音形に関して逸脱の感じられるもの。
- (B-1-2) 文字数に関して逸脱の感じられるもの。

の二つが設定された。これらの(B)に属する修辞例の表現上の“逸脱”とは、具体的に言えば、韻を踏んだ文章、回文、定型詩、などの、普通の散文では生じてこないであろう特殊な音韻 (あるいは文字) の配列が感知される表現を言う。

なお、Table 1 および Table 2 の実例欄には、それぞれの分類項目にあてはまるとみなされた代表的修辞表現例が挙げられている。ただし、挙げられた表現の全体が問題になっているわけではない場合もあり、その場合には、問題の部分を引用符で包んだ。それぞれの実例の末尾の丸括弧中に示されているのは、その表現例が称される伝統的修辞レッテル、あるいは、状況

Table 1

会話の原則以外の規則（性）などに照らして感じられる逸脱の種類

逸脱の種類	文脈依存性(I/D)	実例
A コミュニケーション上の規則(性)からの逸脱		
1 文字通りの意味における、会話の原則からの逸脱 (=Table 2)	I	<ul style="list-style-type: none"> • “シンケン” な顔付[MS] • (暗示引用)
2 正書法からの逸脱	D	<ul style="list-style-type: none"> • あの才、これ、作ってみたんですけど(文面で)[IS] • 今夜もひと押し “いたすかな” [IS]
3 文体に関する規則からの逸脱	I	<ul style="list-style-type: none"> • キナリ 好きなり 春となり(押韻)[TK] • (定型詩) • 軽い機敏な仔猫何匹いるか(回文)[TK] • (数え歌)
B 文脈内での表現の出現位置と頻度とに関する統計上の標準値からの逸脱		
1 その結果として、反復性、繰り返し性が生じている	1	1 音形に関して反復性、繰り返し性が生じている
2 文字数に関して反復性、繰り返し性が生じている	2	2 その結果として、前後対称性が生じている
3 その結果として、順序性が生じている	3	

Table 2

会話の原則に照らして感じられる逸脱の種類

逸脱の種類	文脈依存性(I/D)	実例
<p>量の原則に関する逸脱</p> <p>(a)情報量が不足しているかまたは欠如している</p> <p>1 表現自体がなく、従って情報量がない</p> <p>1 表現全体の省略による情報の不足, 欠如</p>	I	<p>・「近頃は、また短髪が流行りなんだからね」「……………」」「若い人がジーパン離れしてきてるって話だねえ……」(黙読(…))[IS]</p>
<p>1 表現全体の省略による情報の不足, 欠如</p>	D	<p>・「値段もまけるだよ」と、老人はうめきたてた。「先生のこったからよ、思いきって五までまけるだ、たつた五だ」</p> <p>“私が答えると”, 老人は片手を出した。</p> <p>「タバコ」と老人は云った。[YS, SN81]</p>
<p>2 表現の一部の省略による情報の不足, 欠如</p>	I	<p>・生きていること“……”結局それではできただけ満足していられるように工夫することだ(黙読(…))[FS, G]</p>
<p>2 表現はあるが,</p> <p>1 特定化に必要な情報が不足している</p> <p>1 縮約の結果残った表現の指示対象と意図されている指示対象との間にカテゴリーのずれがある</p> <p>1 全体部分関係の部分へのずれによる不足</p> <p>2 場所へのずれによる不足</p> <p>3 付加的属性へのずれによる不足</p>	D	<p>・「なにいてやんでえ、いつおめえと酒を飲んだい?」「飲みましたよ」[OK]</p> <p>・春雨やものがたり行く“雲”と“傘”(換喩)[YB, SN78]</p> <p>・直ぐに“無縁坂”へ往かうかとも思ったが(換喩)[M0, SN78]</p> <p>・おっと今はねれた罫だが、やつは百五十万円の錦鯉だよ……ほかに“農林大臣賞”や“水産長官賞”がそろそろ泳いでいるのだよ(換喩)[HD, SN78]</p>
<p>2 カテゴリーのずれはないが、代置の結果,</p> <p>1 指示範囲が拡大さればかざれている</p> <p>1 内在的属性への代置による不足</p> <p>2 上位下位関係の上位概念への代置による不足</p> <p>3 精度の低い方への代置による不足</p> <p>4 「のような」などのたとえへの代置による不足</p> <p>5 先行または後続する状況への代置による不足</p> <p>6 反対の状況の否定による不足</p>	D	<p>・その日一日時折思い出したように舞っていた“白いもの”が、そのころから本調子になって間断なく濃い密度で空間を埋め始めた。(類による換喩)[IV, SN78]</p> <p>・“自然”は痛いいが栗のこと)[TK]</p> <p>・決して満点のとれないような問題ではない。現にこのクラスの“何人か”は満点をとっている。</p> <p>・法王がゴブアキオ八世は、“狐のようだ”その地位につき、“獅子のようだ”その職務をおこない、“犬のようだ”死んだという。(直喩)[M, SN78]</p> <p>・……じゃあおめえ、どうしても飲めねえんだな、だめかい? …… “やさしく言ううちに”飲みなよ(転喩(換喩の一種))[R, SN81]</p> <p>・汗水垂らして床を握って床を這い回り、目の色変えて吊り床を上げ下げする図は、どう考えて</p>

- も “気の利いた風景でない” (緩叙法)[UH, SN81]
 - 人は “パン” のみによって生きるのではない(種による提喻)[B, SN78]
 - 1 • 女は女(トートロジー)
 - 0 • これは本です(分かりきっている状況で)
 - 1 • 逢わぬ人とは、別離もない(分析命題)[IS]
 - 0 • 今年生まれた赤ちゃんが、お嫁にいくのは21世紀です[TK]
 - 1 • 今夜、死ぬのだ。それまでの教時間を、私は幸福に使ひたかつた。ごつとん、ごつとん、のろすぎる電車にゆられながら、暗鬱でもない、荒涼でもない、孤独の塵でもない、ちえの果てでもない、狂乱でもない、阿呆感でもない、卑劣でもない、悶々でもない、麻痺でもない、恐怖でもない、刑罰でもない、憤怒でもない、諷刺でもない、秋涼でもない、平和でもない、後悔でもない、沈思でもない、打算でもない、愛でもない、救いでもない、言葉でもない、言葉でもつてそんなに派手に誇示できる感情の看板は、ひとつも持ち合せてゐなかつた。(ためらい、列叙法)[DU, SN81]
 - トラは死して皮をのこし、人は死して名をのこす(対比)[C]
 - “28.455キロメートルの” 海洋線がある日本に、たった20数カ所のマリーナしかないなんて。(数の提喻)[TK]
 - 「笑いごとじゃないうぞ」とウィングが言った。「笑う気はないさ」、シェーンはライターの火をつけた。「ちつとも、だからと言って“泣きたいと思わん”がね。」(緩叙法)[H, SN78]
 - その日一日時折思い出したように舞っていた “白いもの” が、そのころから本調子になって間断なく濃い密度で空間を埋め始めた(類による提喻)[Y, SN78]
 - 人間は一本の葦にすぎない(隠喩)[P]
 - 袖を濡らす(転喩(換喩の一種))[SN81]
 - 顔に泥ぬられたやて、えらいすまなんだな, “立派な” 顔に泥塗って(反語)[NA, SN81]
 - 支配人は総盆菌をにゅつとむいて笑ったので, “あたりが黄金色に目映く輝いた”(誇張)[HM, SN78]
 - 1 • いいコートはつぶよやく(隠喩(擬人法))[IS]
-
- 2 指示範囲が縮小され過ぎている
 - 1 集合要素関係をなす典型事例による不足
 - 2 情報が無い
 - 1 同語反復になっているだけで情報が無い
 - 2 語彙の分析になっているだけで情報が無い
-
- (b)情報の過剰
- 1 表現の量が増え情報量も過剰
 - 1 表現の羅列による過剰
 - 2 意味的対照関係をなす項目の添加による過剰
 - 1 表現内容の精度に関して過剰
 - 2 指示範囲に関して過剰
 - 1 反対の状況の否定による過剰
 - 2 内在的屬性による過剰
 - 3 「のような」などのたとえによる過剰
-
- 質の原則に関する逸脱
- (a)真実性の欠如
- 1 事実でない
 - 1 真である命題を偽として言う
 - 2 偽である命題を真として言う(存在しないことを存在させることとして言う)
 - 1 単に存在しないことを存在することとして言う
 - 2 後続状況がない場合に後続状況で先行状況を表現しているかまたはその逆の関係をになっている
 - 3 意味が反対になっている
 - 4 程度が過大または過小の方向へずれている
 - 2 ありえない

- ・(隠喩(共感覚表現))
- ・あの方こそ花、本当の花でございませす(隠喩)[S, SN78]
- ・被子はだまらまらってゐたが、胸の底に“冷たい炎”がふるへた(逆説(撞着語法))[KY, SN81]
- ・たしかにそれは“利休”でありながら、利休ではなかつた”(逆説(撞着語法))[NY, SN81]
- ・あれ、地球が落ちてくる(スカイダイビング中)(逆説)[TK]
- ・おいしい生活[IS]

(b)証拠の欠如

関連性の原則に関する逸脱

- 1 表現の量は過剰でないが情報量が過剰(臺の原則に関する逸脱の0)
 - (b)情報の過剰の2の項目に対応する)
 - 1 表現内容の精度に関して過剰
 - 2 指示範囲に関して過剰
 - 1 反対の状況の否定による過剰
 - 2 内在的屬性
 - 3 「のような」などのたとえ

様式の原則に関する逸脱

- (a)あいまい
 - 1 指示対象がはっきりしない
 - 2 断定の程度が弱められている
- (b)多義的
 - 0 おいしい生活[IS]
 - 0 “自然”は痛い(いか栗のこと)[TK]
 - 0 “その節”はとんだ先孔をいたしました[OK]
 - 1 彼の言い方は断定“的”ではあるが、決して断定してはいなかつた。
 - 0 ふるえていては、夏は語れない(コートのコピー)(多義表現)[TK]
- (c)簡潔でない
 - 0 (対比, 列叙法, ためらい, 羅叙法)
- (d)順序正しくない
 - 1 表現が無秩序に配列されている
 - 2 旧・新情報の順序が逆転している

説明であり、角括弧中に示されているのは、その実例の出典である。また、Table 1 および Table 2 中の、項目名の後の記号“i” (independent) はその表現が文脈から独立させても逸脱が感じられるものであることを表し、“d” (dependent) は文脈があって初めて逸脱が感じられるものであることを表わしている。

考察

Table 1 および Table 2 に示した分類分析、特に Table 2 の“会話の原則”に照らした分析から、以下のことが本研究の結論として指摘できる。

まず第一に、修辞表現における逸脱は質(真実性)に関する違反(例文(1)参照のこと)だけではない。例えば、例文(2)のように量(量)の原則に関する違反もある。このことは、既に Wilson & Sperber (1981) などによって指摘されていることではあるが、Grice (1975) が、反語、隠喩 (metaphor)、緩叙法 (meiosis)、誇張 (hyperbole) の4種類の修辞表現を質の原則だけに対する違反としてとらえていることの問題点を改めて確認するものである。

第二に、実際に感じられる具体的な逸脱は、会話の原則の項目に多岐に関わっており、量、質、関連性、様式のすべてに亘って見られる、ということが挙げられる。このことは Wilson & Sperber (1981) の考えに対する疑問の提出でもある。Wilson & Sperber (1981) は、会話の原則間の関係や個々の原則の意味に基づいて Grice (1975) の関連性の原則を定義し直し、量、質、関連性、様式の四つの原則を彼らが言うところの関連性の原則ただひとつに還元してしまおうことができるとしている。しかし、究極的には関連性の原則に対する違反があるとしても、実際に感じられる具体的な逸脱は会話の原則の他の項目にも関わっているのであるから、逸脱をとらえる規準として関連性の原則ただひとつを挙げる考えは妥当ではないと思われる。

第三に、会話の原則の項目間の非均質性と相互関連性に関わる考察として、次の 1, 2 の二点を指摘することができる。

1. Grice (1975) は、量、質、関連性の三つの原則は発話の内容 (what is said) に関するものであり、様式は伝達の仕方 (HOW what is said is to be said) に関わるものであるとしているが、関連性は様式にも関わってくる。例えば、従来“対比”と呼ばれている修辞範疇に属する例文(3)

(3) トラは死して皮を残し、人は死して名を残す。[G]

について言えば、後半部分が本来伝達したいことであるとした場合、前半部分が内容の関連性に逸脱があるのみならず、例文(3)全体が、このような簡潔でなく冗長な表現形式が用いられている点で、様式面での関連性に逸脱があるとみなすことができる。

2. 会話の原則の項目は互いに完全に独立しているわけではなく依存関係がある場合もある。具体的には、以下の (a), (b), (c) の三つの場合が見い出された。

(a) 量の原則と関連性の原則の両方に違反している場合もある。例えば、例文(4)

(4) 28,455キロメートルの海岸線がある日本にたった20数カ所のマリナーしかないなんて。

[TK]

の“28,455キロメートルの”という部分は、表現内容の精度という点において情報の量が過剰であり量の原則に違反しているが、同時に、情報の量が過剰であれば、余計なことが付け加えられて述べられているという意味において、関連性の原則にも違反していると言うことができる。これは Grice (1975) が既に指摘していることでもある。

(b) 量の原則と様式の原則の両方に違反している場合もある。例えば、例文(5)

(5) 自然は痛い。[TK]

の“自然”がいが栗のことを意味しているとした場合には、そのことを特定化するのに必要な情報が“自然”という語に含まれていないので、例文(5)は情報が不足していて量の原則に違反しているとみなすことができるが、同時に、情報の不足によって“は痛い”の主語としての“自然”の指示対象がはっきりしないという点で、様式1“表現の不明瞭さを避けよ”の原則にも違反していると言うことができる。

(c) 質の原則と様式の原則の両方に違反している場合もある。例えば、例(6)

(6) おいしい生活。[IS]

はありえないことを述べており真実性を欠いているので質の原則に違反しているが、同時に、この場合指示対象がはっきりしないという点で様式1“表現の不明瞭さを避けよ”の原則にも違反していると言うことができる。

第四に、依存関係のない複数の項目に関わる逸脱もある。例えば、例(7)

(7) その日一日時折思い出したように舞っていた白いものが。．．[IV, SN78]

の“白いもの”は、雪のことを意味しているとした場合その特定化に必要な情報が不足しているという点において量の原則に違反しているが、一方、文字通りには白いもののクラスを提示していて雪以外のものをも連想させ得るため指示の範囲に関して情報が過剰であるとも言える。つまり、この例では、量に関して過剰でも過少でもありと分類可能な、逆説的で両義的な逸脱があると考えられる。

なお、以上述べてきたような逸脱を、隠喩を対象にした考察の中で、安井(1978)は“共起場面の欠如”としてとらえ、山梨(1982)は“叙述行為の違反”としてとらえている。しかし、前述した選択制限も、“共起場面の欠如”も、“叙述行為の違反”も、質の原則の違反と考えることによって、会話の原則からの逸脱として扱うことができる。したがって、これらを会話の原則とは別の規準とみなす必要はなく、むしろ、本研究で行ったように、会話の原則の下位項目とみなしてその妥当性を問題にしていくほうが適当と思われる。

以上が、会話の原則に照らしてみた場合の逸脱の性質について結論できたことである。その他の結果としては、既にTable 1に示されているように、逸脱で問題になるコミュニケーション

ン上の規則（性）として、会話の原則の他に正書法と文体に関する規則を設定することが可能であるということ、またさらに、逸脱の有無を判定する規準となり得るものとして、コミュニケーション上の規則（性）とは別に、文脈内での表現の出現位置と頻度とに関する統計上の標準値もあるということ、が分かった。

今後の課題

本研究では以上のような分析結果を得たが、これらの結果は修辞の理解や発話の心理過程の解明のために有効に利用されなければならない。以下に、これらの結果に基づいて考えられる今後の心理学的研究課題を挙げておく。

まず第一に、検出される逸脱の種類が、ここで提案された項目によって全て尽くされているか。第二に、逸脱の依存関係と階層構造が、検出される逸脱を正しく反映しているか、の検討がある。

第三に、ここで提案された、検出される逸脱の種類分類によって、修辞表現の質やプラス・アルファの心理的な効果に関しての修辞表現間の類似性と相違点を捉えることができるかどうか、の検討がある。例えば、アイロニー（irony）とパロディ（parody）との違いは、前者が言葉の内容や思考（thought）の再生（reproduction）であるのに対して後者が言葉使いそのものの再生であるとする考え（Sperber & Wilson, 1981; Sperber, 1984）があるが、このような区別はここで提案された枠組みの中で解釈可能かどうか。あるいはそもそも、この区別は、我々の枠組みが問題にしている修辞理解過程の第一段階でなされる区別なのか、それともより後の段階でなされる区別なのか。さらに、もし後の段階の問題とすれば、その段階で問題になる修辞の種類とここで扱っている修辞の種類とはどのような関係にあるのか。等々の問題の検討である。

第四に、逸脱の検出の個人差には、検出される逸脱の種類の違いによる場合と逸脱の検出能力（次第に細かく枝分かれしていく分類階層のどのくらいの深さまでその逸脱を検出できるか）の違いによる場合とがあると考えられるが、ここで提案された枠組みによってそのような個人差が説明可能かどうか、の検討がある。

第五に、逸脱があっても修辞的な効果をもたない場合があるが、修辞的な効果をもつ場合ともしない場合とはどこがどう異なるのか、の検討がある。

最後に、本研究の最終的な目標のひとつである修辞表現の理解過程と逸脱の検出過程との関係についての検討がある。すなわち、今回の研究では逸脱の検出過程を修辞理解過程の第一段階と見なしこれだけを取り出して考察したが、この検出過程がその第一段階であるという考えの妥当性の検討である。例えば、本当にこの検出過程が理解過程に先立って動く別個の過程としてある（Jorgensen, Miller, & Sperber, 1984）のか。あるいは、普通の処理過程で処理で

きなかった表現が逸脱として検出され、その場合だけさらに別の処理が必要とされるのか。あるいは、普通の過程で処理しきれなかったものがさらにもう一度同じ過程によって別の解釈が見つけ出されるだけである (Sperber & Wilson, 1986) のか。それとも、普通の理解過程ではどちらも働いている2種類の手続き、知覚に関するテスト (perceptual test) と機能に関するテスト (functional test)、のうちの一方しか適用されていない状態がここで言う逸脱である (Miller, 1977 の隠喩の研究) のか。等々の可能性である。それら様々な可能性について、具体的な過程モデルを作成していくこと、さらには、それにともなって各モデルの心理学的妥当性の検証をはかっていくこと、それらが修辞の認知心理学的研究にとっての今後の究極的な課題と行うことができるであろう。

言語資料

- IS 糸井重里 1984 広告批評別冊3 糸井重里全仕事 マドラ出版
- IHD 井上ひさし ドン松五郎の生活
- IHM 井上ひさし モッキンボット師の後始末
- IV 井上靖 比良のシャクナゲ
- UH 梅崎春生 崖
- OK 興津要(編) 1972 古典落語上 講談社
- KY 川端康成 舞姫
- G 現代言語セミナー(編) 1985 スルドイ言葉の辞典 冬樹社
- FS F. サガン ある微笑
- SN78 佐藤信夫 1978 レトリック感覚 講談社
- SN81 佐藤信夫 1981 レトリック認識 講談社
- S シェイクスピア ロミオとジュリエット
- B 聖書
- DO 太宰治 狂言の神
- TK 土屋耕一 1984 広告批評別冊4 土屋耕一全仕事 マドラ出版
- NY 野上弥生子 秀吉と利休
- NA 野坂昭如 殺さないで
- P バスカル バンセ
- H プレット・ハリディ 大いそぎの殺人
- MS 室生犀星 杏っ子
- MO 森鷗外 雁
- YS 山本周五郎 青べか物語

YB 与謝蕪村
R 落語 らくだ

引用文献

- Chomsky, N. 1965 Aspects of the theory of syntax. Cambridge, Massachusetts: The M.I.T. Press.
- Grice, H. P. 1975 Logic and conversation. In P. Cole & J.L. Morgan (Eds.), Syntax and semantics, Vol. 3. Speech acts. New York: Academic Press. Pp. 41-58.
- Jorgensen, J., Miller, G. A., & Sperber, D. 1984 Test of the mention theory of irony. Journal of Experimental Psychology: General, 113, 112-120.
- Miller, G. A. 1977 Practical and lexical knowledge In P. N. Johnson-Laird & P. C. Wason (Eds.), Thinking: Readings in cognitive science. Cambridge University Press. Pp. 400-410.
- 佐藤信夫 1978 レトリック感覚 講談社
- 佐藤信夫 1981 レトリック認識 講談社
- Sperber, D. 1984 Verbal irony: Pretense or echoic mention? Journal of Experimental Psychology: General, 113, 130-136.
- Sperber, D., & Wilson, D. 1981a Irony and the use-mention distinction. In P. Cole (Ed.), Radical pragmatics. New York: Academic Press. Pp. 295-318.
- Sperber, D., & Wilson, D. 1981b Pragmatics. Cognition, 10, 281-286.
- Sperber, D., & Wilson, D. 1986 Relevance: Communication and cognition. Oxford: Basil Blackwell.
- Wilson, D., & Sperber, D. 1981 On Grice's theory of conversation. In P. Werth (Ed.), Conversation and discourse. London: Croom Helm. Pp. 155-178.
- 山梨正明 1982 比喩の理解 佐伯胖(編) 認知心理学講座3 推論と理解 東京大学出版会 Pp. 199-213.
- 安井 稔 1978 言外の意味 研究社出版